

古いはさみ

小川未明

青空文庫

どこのお家うちにも、古ふるくから使つかい慣なれた道具どうぐはあるものです。そしてそのわりあいに、みんなからありがたがられていないものです。英えいちちゃんのおうちの古ふるいはさみもやはりその一つでありましよう。

英えいちちゃんの、いちばん上うへのお姉ねえさんが小ちいさいときに、そのはさみで折おり紙がみを切きったり、また、お人にんぎょう形の着物きものを造つくるために、赤あかい布きれや紫むらさきの布きれなどを切きるときに使つかいなされたのですから、考かんえてみるとずいぶん古ふるくからあつたものです。

その時分じぶんにはこんな黒くろい色いろでなく、ぴかぴか光ひかっていました。そして刃はもよくついていてうっかりすると、指ゆびさきを切きつたので

あります。

「よく氣きをつけて、おつかいなさい。おててを切りきますよ。」と、お母かあさんが、よく、ご注意ちゅういなさったのでした。

お姉ねえさんは、おちついた性せい質しつで、お勉べん強きやうもよくできた方かたですから、めったに、このはさみで指ゆびさきを切るようなことはしませんでした。使つかつてしまえば、箱はこの中なかに、ちゃんとしまつておきました。

お姉ねえさんが、まだ十とおか十一のころです。ある日ひのこと、

「あれ、なあに。」と、ふいにお母かあさんにききました。

「なんですか。」と、お母かあさんは、おわかりになりませんでした。

「アカギタニタニタニって？」

「あああれですか、はさみ、ほうちよう、かみそりとぎという、とき屋^やさんですよ。」と、お母^{かあ}さんはお笑^{わら}いになりました。

「私^{わたし}の持^もっている、はさみといでもらっている。」と、お姉^{ねえ}さんがききました。

このときの、アカギタニタニがいつまでもお家^{うち}の笑^{わら}い話^{ばなし}の種^{たね}となりました。

「ほら、アカギタニタニがきましたよ。」と、とき屋^やさんが、まわってくると、お母^{かあ}さんが笑^{わら}っておっしゃいました。それからいくたびこのはさみは、とき屋^やさんの手^てにかかったでしょう。

お姉^{ねえ}さんは、女^{じよ}学^が校^{っこう}を卒^{そつぎ}業^{よう}なされると、お針^{はり}のけいこにいらっしやいました。そのときには、このはさみは、もう、そんな

やく
役にたたなかつたので、新しい、もつと大きなはさみをお求めに
なりました。そして、いままでのはさみは、平常、うちの人の使
よう
いとされてしまいました。けれど、ちょうど、英ちゃんの上の
兄さんが、いたずら盛りであつて、このはさみで、ボール紙を切
つたり、また竹などを切つたりしたのです。

けれど、はさみは、不平をいひませんでした。あるときは、縁
んたい
台の上に置き忘れられたり、また冷たい石の上や、窓さきに置
お
かれたままでいたことがありました。そんなときは、さすがにさ
びしかつたのです。

「はやく、お家へはいらないと、知らぬ人につれられていつてし
まうがな。」と、星の光をながめて心細く思つたことがあります

ました。

「また、はさみが見えませんが、どこへいったでしょう。」と、
 あくる朝、お母さんが、つめを切ろうとして、はさみが見つから
 ないので、こうおっしゃいました。

「きのうまで、箱の中にはいつていたんですよ。また、太郎さん
 が使つて、どこかへ置き忘れたのでしよう。」

姉さんは、方々おさがしになりました。そして、子供たちが
 遊ぶ門の石の上に置いてあつたのを見つけなさいました。

「まあ、こんなところに置いてあつて、よく人に拾われなかったこ
 と。」

そういつて、お姉さんは、子供の時分からのはさみをなつかし

そうに、ごらんなさいました。すると、過ぎ去った日の記憶が
ぎつぎと目に浮かんできたのです。

「長くあるはさみね、だいじにしなければならぬわ。」

お姉さんは、なくならないように、赤いひもをはさみにおつけ
になりました。

しかし、はさみは、もう年をとって、たいした役にはたちませ
んでした。

「切れない、はさみだなあ。」と、太郎さんが、かんしやくを起
こして畳の上へ投げ出しても、はさみは自分の切れないのをよく
知っていましたから、がまんをして、あきらめていたのでありま
す。そしてこのごろは、げたの鼻緒を立てたり、つめを切ったり

するときだけにしか使つかわれなかつたけれど、年としとつたはさみは、
 若いわかころ、お嬢じょうさんが人にんぎよう形の着物きものをつくるときに、美うつくしい千
 代紙よがみや、折おり紙がみを切きつたり、また、お母かあさんが、お仕しごと事をなさる
 ときに使つかわれた、いくつかの華はなやかな思おもい出でを目めに浮うかべて、せ
 めてものなぐさめとしていたのです。

あるときのことです。いつもの、とき屋やさんがやってくると、
 「アカギタニタニタニがきた、はさみといでもらつていいでしょ
 う。」と、太郎たろうさんは、お母かあさんにいました。とき屋やさんのこ
 とを、いつか、アカギタニタニタニとしてしまったのでした。

お母かあさんが、いいとおっしゃったので、とき屋やさんにたのむと、
 おじいさんは、しみじみとはさみをながめて、

「もう、古ふるくなって、腰こしがよわくなりましたから、といでもそう切きれませんよ。」といいました。人間にんげんと同じように、はさみの腰こしがまがって、よわってしまったのでした。

ちょうどその時じぶん分、いちばん小ちいさい英えいちゃんが学がっこう校に上あがりました。そして学がっこう校で手しゅ工こうにはさみがあることになりました。「英えいちゃんが持もっていくのに、ちょうどあぶなくてこのはさみがいいでしょう。」と、お母かあさんが、赤あかいひものついているはさみをお出だしになりました。

はさみはまた筆ふで入れの中なかにいれられて、その後英ごえいちゃんのお供ともをすることになりました。お家うちの人ひとはこのはさみならとみんな安あ心しんしていました。なんでもすべて古ふるくからのものには、こうし

た愛と安心と親しみが
あるものです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「古《ふる》いはさみ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古いはさみ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>